慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	インタビュー①：小樽芸者 平成22年3月(当時85歳)
Sub Title	
Author	宇沢, 美子(Uzawa, Yoshiko) 浅原, 須美(Asahara, Sumi) 坂上, 貴之(Sakagami, Takayuki) 坂本, 光(Sakamoto, Hikaru)
Publisher	
Publication year	
Jtitle	三菱財団人文科学研究助成事業インタビュー No.1
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	三菱財団人文科学研究助成による研究・インタビュー記録。 2010年3月取材
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO32001002-00002010-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

小樽　芸者　平成 22 年 3 月（当時 85 歳）

大正 13 年北海道生まれ。家が子沢山で貧しく、小学校卒業後、置屋に預けられ養女になる。半年の見習いの後、昭和 12 年 14 歳で半玉、15 年 17 歳で一本になる。

○聞き手　●芸者

＜戦前の小樽花柳界の様子＞
「戦前は見番が四つ、芸者が 300 人。スナックみたいなところはないから、一次会でも二次会でも三次会でも、みんな料理屋に行ったのさ」

○さっき妙見川の辺りを歩いてきました。あの辺りが昔の花柳界だったのですね。
●今は（妙見川は）途中までしかないでしょ。あれが向こう（海のほう）までずーっと川だったのさ。その妙見川を挟んで北斗見番と昭和分見という見番（花柳界の連絡事務所）のがあったの。あそこらへんずっと料理屋さんが多かった。だからよく働けたの。スナックみたいなところはないでしょ、昔。だから、一次会でも二次会でも三次会でもみんな料理屋に行くんだもん。中島屋さんは妙見川のところにあった大きい料理屋さん。それから水天宮さんてあるでしょ。水天宮の石段なんか、急な石段で上がるのも大変だ。その石段を下りてきたところがね、迎陽亭(こうようてい）っていう料理屋さんだったの。今は、マンションになってるけどね。
○待合（＊料理人を置かず、簡単なつまみと酒だけを提供する二次会専用の店）みたいなのはなかったのでしょうか？
●うん、お料理出して、姐さんがたが唄ったりなんかする料理屋さんばっかりだ。待合っていうのはなかったね。小っちゃい料理屋さんみたいなのはいっぱいあった。
○見番が四つありましたよね。昭和本店と分店と、北斗見番と中央見番。
●私がいたときはね。
○それぞれ格の違いがあるのですか?　どこの見番が上とか、下とかは?
●それはないの。……ないけど、だいたい決まってる（笑)。やっぱり海陽亭（＊小樽で一番の格式を誇る料亭）に入る人はね、昭和本店と決まってる。
○もう一つ、末広見番ていうのもあったと資料に書いてありました。
●あったの、昔。でも私が出たときはもうなかったの。

＜芸者になったころの話＞
「家にたくさん子どもがいたから、一人でもいなくなったほうが食べるには楽だと……。そうして小樽の置屋さんの養女になったわけさ」

〇置屋さんの養女になられたそうですね。
●そうそう、昔は家にたくさん子供いるから、一人くらいいなくても。いなくなったほうが、食べるのにはいいんじゃないかって（笑）。そこで、この子を欲しいからって、置屋の養女になったわけさ。うちの娘になってくれって言われて。
〇養女にしたのは、芸者としてこの子はすごく売れると思ったからでしょうか。
●そうかもね、わかんないけど、そうかもしれない。小さいときから踊りの稽古はしてたからね。芸者になろうと思って習ってたわけじゃないけど、行ったところがたまたま芸者の置屋だったから。
〇昔は、置屋さんが預かった女の子を養女にするっていうことはよくあったのですね。
●私の友達も、置屋の養女になった人いるよ。やっぱり、踊りをやってた人だけどね。
〇北海道じゅうから女の子たちが来ていたのですか、小樽には。
●寿都（すっつ）とかの人もよく小樽に来てたね。それから江差とか。そっちの方から来てた。
〇戦前の小樽の繁栄は凄かったですものね。
●私が来たころは、300 人も芸者衆がいたもの。私は数えの 14 で半玉になった。半玉になるときも、試験があるわけさ。見番に舞台があって、そこで踊って、姐さん方が 7 人くらい並んでね、いいっていえば出られるわけさ。だめだったらだめ。その前は、半玉になる前は、見習いっていうのがある。
〇見習いはどこでやるのですか？　料理屋さん？
●料理屋さんで。いい姐さんにつかないと、いい料理屋さんに行けない。
〇お姐さんに「つく」のですね。
●つくの、まず。お姐さんについて料理屋さんを回るの。見習いがコップ並べて用意しなきゃならない。それを半年くらいやった。
〇それは早い方ですか?
●早い。何年もやってる人いる。三年くらいの人もいる。私はいい姐さんについたから。
〇どのお姐さんにつくかは自分で決めるのですか?
●置屋のお母さんが、その姐さんは流行るからと頼んでくれて。流行る姐さんにつかないとだめなの。
〇半玉さんのころから海陽亭さんにはよく行ってましたか
●行ってた。ついた姐さんがそこによく入る姐さんだから。その姐さん、小豊（ことよ）姐さんていうの。流行ったからね。その人について。
〇置屋の中で養女さんと、抱えの子の扱いに区別はないのですか？
●差別なんてないね。
〇着る着物も同じで?
●着物はね、親方が用意するんだから。

＜海陽亭のお座敷・昔の旦那衆の遊び方＞

「海陽亭は、入る芸者衆も一流だし、お客さんも銀行の支店長さんなんかで。仕事が終わると家に帰って着物着て袴はいて出てくるんだから、優雅だ」

○同じ大きな料理屋さんでも、海陽亭と迎陽亭ではどこが違うんでしょうか。

●お客さんだね。やっぱり、むこう（海陽亭）は格式あるよ。

○迎陽亭は

●気楽（笑）。

○石原裕次郎氏のお父さんもよく海陽亭に見えていたそうですね。

●うん。裕次郎のお父さんは「どんちゃん」ていうあだ名なの。どんちゃん騒ぎするから。立派な姐さん方ばっかり呼んで、私はお酒持ってったりそういう役目だった。だって上の人しかいないんだもん。私が姐さんて呼ばれるようになったのはだいぶたってから。お客さんも銀行の支店長なんかだったんだけど、いったん家帰って、着物着て、袴はいて、出てくるんだから、優雅だ。私なんかは、姐さんがたがいっぱいいるからお客さんのそばに寄っていけないからね。お客さんが、こっちおいでといわれて初めて行くくらいのもんでね。あとは、姐さんがたのことばっかり気にして。お酒がないなと思うとお酒持っていったり。ビールが少し残っててても、すぐに下げて新しいの置いておくんだから。もったいなかったね(笑)。戦前は洋服着てても三味線弾くお客さんもいたからね。長唄三味線弾いて、自分で唄う。たいしたもんだよね（笑）。

○それは接待で？　それともご自分たちの仲間のお遊びで?

●仲間うちの席でないかな、と思うけどね。大広間でもね、今は（宴会があるときは）最初からお膳なんか並べておくでしょ。そのころは違うんだから。お客さんが先に入ってて、そこに、芸者衆がお膳を持って入って、お客さんの前に置いて、おじぎして、下がるんだから。それを、ずーっと、次から次へと持って出るんだから。

○お客さんがたくさん入っているところに？

●そうだよ、100 人くらい。

○仲居さんじゃなくて、芸者衆がお膳を運ぶんですか？

●そう。仲居さんはその間に、お酒の用意したり、陰で仕事して。

○運んで出るときは若い妓から先に出るのですか、大きいお姐さんから先に出るのですか？

●上の姐さんがたから先に。こっちはその後ろから（笑）。

○お膳を置く順番は、偉いお客さんからですよね。

●うん、そうそう。

○接待などのお座敷はどういうご商売の席でしたか。

●繊維屋に木材屋に、雑穀屋の人がたがよくね。繊維はみんな小樽に買いに来たもんね。

○それは日本中から？北海道から？

●北海道じゃないかなぁ。着物とか、和のもの。店屋の人とかがたくさん、集まるわけさ。みんな買いにくるから。で、買ったら、宴会やる。
○小樽の人が接待するのですか？小樽の問屋さんが、買いに来てくれた人を接待する？
●そうそう。
○お客さんが 100 人いたら芸者衆は何人くらい入りますか？
●何十人は入ったよ。
○そういうときに踊るときは、何丁何枚（＊演奏方の人数を示す言葉。丁は三味線弾き、枚は唄うたいをさす。たとえば二丁三枚は、三味線弾き二人と、唄うたい三人）くらいなりますか？
●その踊りにもよるからね。たいてい二丁はあるからね、二丁三枚とか、三丁四枚とか。
○小樽は北海道でも第一の都市でしたよね、戦前は。
●札幌は戦後だもの。戦後、東京と電話が先に繋がったのが札幌だったから。
○それで小樽にいた会社が札幌に移ったのですね。
●そうそう。
○戦前、よくお客さんで来ていた会社っていうとたとえば？
●木村倉庫、有名だよ、金持ちだもん。北一倉庫を持ってた人ね。お金持ちで有名なのは板谷倉庫。船も持ってたんだ。必ず年に一回ね、板谷倉庫でね、お客さんを招待するわけだ。銀行屋さんを招待するわけだ。そうすると必ず呼ばれて行くわけ。
○海陽亭さんで？
●うん。
○それはいつごろですか？
●お正月。
○芸者衆も正装して？
●そうそう。毎年。でもお客さんはたくさんではないのね。10 何人くらいだ。
○板谷倉庫は花柳界のお得意さんだったんですね。
●行く芸者衆は決まってるけどね。誰でも行くわけじゃない。名取さんて家あった、これも金持ちなんだ、金物屋。あと、須原さん。須原商事も金持ち。旭硝子なんかと一緒に来た人だからね、ガラス屋さんだ。そこの社長が来るわけだ。接待で。そういう人が、旅に行くときは芸者衆も付いていくわけだ、温泉旅行とか。
○旅行には芸者衆を何人くらい連れていってくれるのですか？
●踊る人と弾く人と唄う人と。3 人か 4 人だね。お客さんは、北海道中の人だから、そんないっぱいではないけど
○10 人とか?
●そう。
○玉代もずっとつきっぱなしで。
●そうそう。

〇そういう方たちは、どうして芸者さんを連れていったのでしょうか。
●そこで踊らせたり、唄わせたり。自分たちも、遊ぶのに、話し相手にいいから。
〇となるとやっぱり芸があるっていうのが大事ですね。
●そうだね。
〇お料理屋さんに来て芸者衆を呼ぶと相当なお金がかかりますよね。それでも、料理屋さんに来て芸者衆を呼ぶ価値って何なのでしょうか。目的はやっぱり芸なのでしょうか。
●やっぱり自分たちも唄ったりなんかするからじゃないの。うん。
〇芸者衆に三味線を弾いてもらいたい
●うん。やっぱり楽しいんじゃないかい？　自分も唄える人はね。

＜芸者の生活＞
「小樽は、ふつうの家の娘さんが芸者になることも多かったの。芸事もお座敷のことも身につけられるから、花嫁修業みたいに」

〇昔、芸者さんは季節に関係なく流行ったのでしょう？
●そうだね。お正月なんて昼から仕事だもん、元日の昼から夜までずーっと、何軒も行くもん。大晦日もよ。年末年始は休みなし。だって、年に二日しかないんだもん、休みが。でもね髪結ってるからどこにも行けないのさ（笑）。
〇その二日はいつか決まってるのですか？
●そうね、2 月と……もっと後、秋。
〇休みの日は何をしました？
●なーんにもできないのさ。頭結ってるから。
〇遊ぶっていうことはなかったですか？
●できなかったね。姐さん方がご馳走するからって、ご馳走してくれて、洋食だかに連れてってくれることはあったけどね。
〇お金が入っても使うことがなかった･･･
●お金なんて私らには入らないの、みんな親方のところに行くから。
〇お小遣いなんてなかったのですか。
●なんもない（笑）。髪結いに行くにもお金もらって行くでしょう。
〇芸者さんの子供が女の子だとまた芸者さんになることが多かったですか?
●そうでもないね。だけど、ふつうのお嬢さん方でも芸者になる人いたからね。小樽は割とそういうの多かったよ。芸者になるような家じゃないんだけど、なりたくて芸者になる人がけっこういたよ。芸も覚えるし、お座敷のことも覚えるし。やっぱり、なんていうの、親がそういうのを習わせたかったんじゃないかな、戦前は。
〇ということは、芸者になるのが可哀相なことというイメージではなくて。
●お嬢さんがたでもなるんだから。何ていうの、花嫁修業みたいに。

○いい歳になったらお嫁に行く･･･
●そうそう。
○そうすると､芸者さんだったことが､お嫁に行く場合にマイナスにならないわけですね。
●なんないの。
○逆にきちんと躾けができていることになると。
●そう。花嫁修業みたいな。
○小樽で芸者さんというと､素人さんから見たらけっこうあこがれの存在だっだのですか。
●うん、小樽あたりは。きれいな人がいたのさ、芸者さんで。踊りのお師匠さんもしてたのさ。芸者衆に踊り教えてた。その人を見かけるとね、ふつうの一般の奥さんが、「いやーあの人綺麗だ」って、後をついて歩いたもんだ、って（笑)。

＜戦時中の花柳界＞
「小樽港に海防艦が入るようになって、艦長とかが海陽亭に来るようになった。海軍は海陽亭、陸軍は中島屋と決まっていた」

○戦争が激しくなってきたことを感じたのはいつぐらいからですか。
●数えの 18、19 じゃないかな。
○どういうことで感じました?
●ここ（小樽港）へ軍艦が入ったでしょ。海防艦(かいぼうかん）て言ってたけどね。お座敷で会うでしょ、兵隊さんがたとね。宴会やるから。「嬉野」（うれしの。料亭名）でよく宴会やってたから。海防艦の艦長とかが。
○接待ではなくて自分たちが遊ぶために？
●そうそう。兵隊さんはね。で、また飲みおわれば、船に帰るの。船に泊まってるから。
○小樽に寄港している間に、夜は料理屋さんで遊んで、また夜船に帰ったと。
●だけど、敵機が来たってなんにもおっかないと思わなかったねえー。ワーって頭の上飛んでるんだけどね、なんも、思わなかった。
○でもけっこう低く飛ぶんですよね、敵機は。
●うん。私、岸壁の近くの倉庫で働いていたから。戦争が始まったでしょ、料理屋さんが営業できなくなったでしょ。それで、私、小樽の海軍軍事部に勤めた。兵隊のね、飲み物、酒類とか、お菓子類みたいなものとか、食料とか、服を私たちが供給してやるわけさ。朝の朝礼してから倉庫まで行って､船に積むものを用意してやる。積んでやるわけさ､船に。
○他の芸者さんも一緒に働いていました?
●そこは私だけ。他の人は軍需工場みたいなところ働きに行ってたよ。それでなければ、なんていうの、徴用がかかってくるからね。働いてないとだめなのさ。
○女子挺身隊のような
●そんなようなもんだね。

〇小樽は陸軍はいなかったのですか？
●いた。妙見川のところに、ちょっと下がったところにね、陸軍のあれがあったの、海軍でいえば軍事部みたいなのがあったの。そこにも私の知ってる人で勤めた人がいる。
〇兵隊さんはお料理屋さんは来なかった？
●来たよ。そこらへんで勤めてる人は来ないわ。もっと偉い人は来てたけどね。海陽亭さんは海軍の人たちが行ってたね。陸軍は中島屋に行ってた。
〇戦後間もなく警察の方からまた花柳界を再開してくれといわれたのでしたよね
●一年か二年たってからだよ。それまでも働く人は働いてたんだけど、正式にね、働いてくれって。そのとき 60 何人いたね、（芸者で）出た人。

＜お座敷での遊び＞
「お座敷の締めでやるのは、『奴さん』とか『かっぽれ』。お客さんとやるのは『ぎっちょんちょん』とか『ソーラン節』とか『おけさ』。一緒に踊るのさ」

●お座敷の締めでやるのは、『奴さん』『かっぽれ』。お客さんとやるのは『ぎっちょんちょん』みたいなもの。ぼけ防止になるし（笑）。

「丸い玉子も　切りようで四角　ぎっちょんちょんぎっちょんちょん
　物も言いようで　角がたつ
　おやまかどっこいどっこいどっこいよーいとな　ぎっちょんちょんぎっちょんちょん。
　高い山から　谷底見れば　ぎっちょんちょん　ぎっちょんちょん
　うりやなすびの　花盛り
　おやまかどっこいどっこいどっこいよーいとな　ぎっちょんちょんぎっちょんちょん
　悪いことすりゃ　警察にひかれ　ぎっちょんちょん　ぎっちょんちょん
　赤いべべ着て　縄をなう
　おやまかどっこいどっこいどっこいよーいとな　ぎっちょんちょんぎっちょんちょん」

（歌詞の説明）小樽に悪いことするとひっぱられていくところがあったの。縄につながれて４人も５人も行くんだ。もとは赤い着物じゃなくて、青い着物だった。私、青い着物で引っ張られていくのを見てたから。縄をなうっていうのは、自分がつながれていく縄を、四人の人がなうの。お座敷でやるときは、縄をなうのときは、かたひざ立ててやる。お客さんもやるよ。今でもね、やるときはある。とらとらもやるよ。あとは、ソーラン節とかね。お客さんもいっしょに踊るの。それから、おけさ、とかね。

（一部抜粋・語尾等一部改変）